別紙２

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：趙　秀一

趙秀一氏の博士号請求論文『死者と生者の声を紡ぐ金石範文学――『鴉の死』から『火山島』まで――』は、在日朝鮮人作家・金石範（キムソクボム）（1925 - ）の「鴉の死」から『火山島』までを取り上げ、済州島四・三事件における死者や生き残りの声なき声を聴き取るという一貫した主題、ならびにその主題を表現するために、絶えず工夫され続ける新たな「日本語」の文体、語りの構造について、分析を行なった論文である。

第一部「金石範文学のはじまり――済州島三部作を読む」では、「看守朴書房（ソバン）」（1957）、「鴉の死」（1957）、「観徳亭」（1962）を取り上げ、登場人物の移動の履歴、日本語と朝鮮語が混合される文体のなかに朝鮮半島をめぐる暴力の歴史を織り込む手法、看守、翻訳者、「でんぼう爺い」などの人物造形のなかに死者の声を聴き取るという主題を込める手法、また済州島におけるハンセン病の閉じ込めと共産主義者狩りの暴力を重ねて描く手法を分析した。

第二部「金石範の「日本語」が生み出す人間像を問う」では、「糞と自由と」（1960）、「虚夢譚」（1969）、「万徳幽霊奇譚」（1970）を取り上げ、朝鮮人徴用工が相互に対立させられ管理されるなかで、敗北を余儀なくされていく知識人の主人公、在日朝鮮人を生きることに伴う本物／偽物の区別に夢のうちで苦悩する主人公、朝鮮人狩り、共産主義者狩りを生き延び幽霊のようにさ迷う主人公が、その向こう側を読者に想像させる「日本語」で生み出されてくるさまを分析した。

第三部「書くことの原点を問う――なぜ書かねばならなかったのか」では、『１９４５年夏』（1974）、「遺された記憶」（1975）、「乳房のない女」（1981）という、金石範の自伝的要素が強い作品を取り上げ、日本と朝鮮、日本語と朝鮮語のあいだで引き裂かれる主人公を起点としつつ、四・三事件を生き延びた者たちの証言に触れ、激しく動揺し、記憶し得ない記憶をそれでも未来へとつないでいこうとする主題を、それぞれの作品の語りの構造の意味に即して分析した。

第四部「『火山島』の世界を読み直す」では、『火山島』全七巻（1976～1997）を取り上げ、李芳根（イバンゲン）と南承之（ナムスンジ）という二人の主人公の相関によって重層化する語りの構造、殺人や自殺を通じて問われる「自由とは何か」という主題、同時代の占領下日本で闘われた阪神教育闘争が作中で描かれることの意味について考察し、読者を当事者として四・三事件の時空間に巻き込んでいこうとする作品全体の狙いを分析した。

終章では、これまでの議論をまとめ、金石範の文学がいかなる意味で世界文学と呼べるのかについて論じた。

審査委員からは、足を引きずって歩く「でんぼう爺い」の姿は、死者の重みを引きずりながら、目的地もないまま歩き続けることの形象化なのではないか、作品間で同じモチーフが何度も繰り返されることの意味をどこかでまとめて論じるべきではなかったかという指摘、同じ四・三事件を扱っていても、作品が書かれる時期によってその言葉遣いなどに同時期の日本・韓国における歴史的コンテクストが影響を与えており、その往還関係にもっと注意が払われるべきではなかったかという指摘、作者・語り手・書き手という概念の使い分けに混乱が見られる、終章での世界文学の議論には、デイヴィッド・ダムロッシュやチャン・ロンシーよりも、未邦訳ながらレベッカ・ウォルコウィッツの著書がふさわしかったのではないかという指摘が出された。

しかし、本論文が、文体および語りの構造の精緻な分析を通じて、なぜ四・三事件が金石範によって小説というかたちで表現されねばならなかったのかという必然性を明らかにしているという点、歴史学とは違ったアプローチで東アジアの歴史の隠された側面を提示しているという点、金石範の文学がいかに現代において読まれねばならない達成であるかが見事に論じられているという点について、それぞれの審査員から高い評価が与えられた。また、本論文が、金石範の文学に対するほとんど初めての総合的な研究であることについても、その意義は高く評価されるべきである。

以上から、本審査委員会は、趙秀一氏に対して、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。